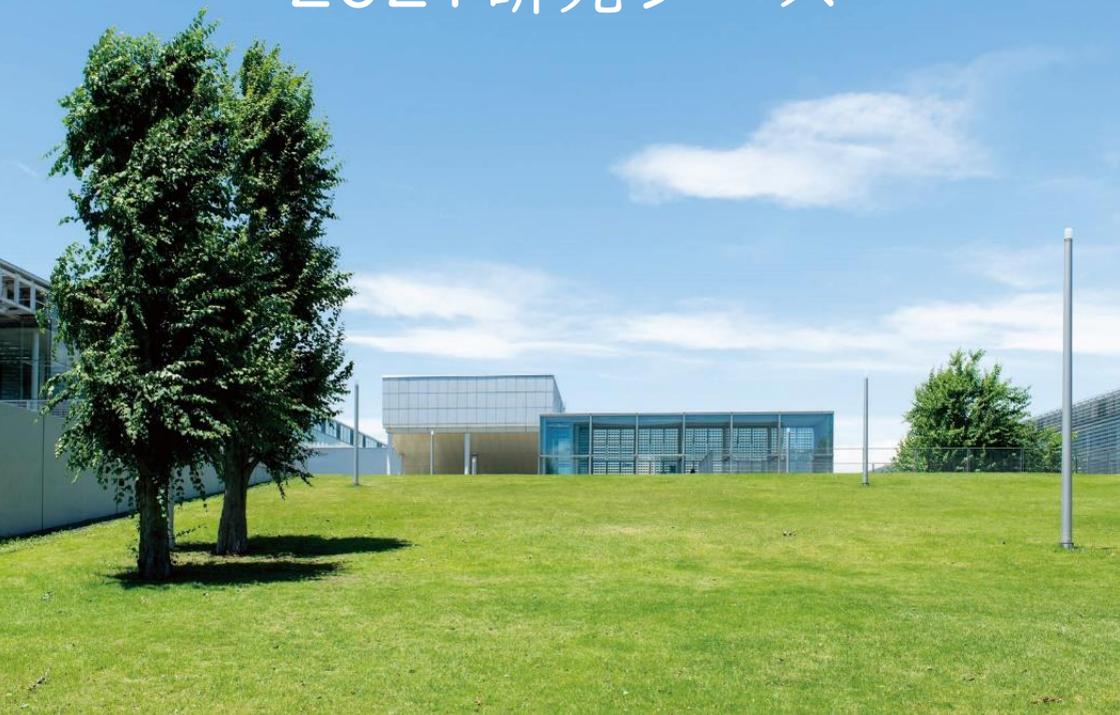


埼玉県立大学 2021研究シーズ



掲載

- 新掲載 12シーズ
- 更 新 4シーズ



新掲載12シーズン 更新4シーズン

目次

頁	新・更	タイトル	氏名		
2	新掲載	養護教諭とスクールソーシャルワーカーの専門職が協働した保健室経営の実証的研究	共通教育科	上原 美子	教授
3	新掲載	環境試料中の化学物質の分析法開発	共通教育科	四ノ宮 美保	准教授
4	新掲載	対人(援助)職が困難を乗り越えるための支援	看護	秋山 美紀	教授
5	新掲載	ポジティブ感情の身体的精神的健康への効果	看護	秋山 美紀	教授
6	新掲載	ケアラー支援の研修と看護・介護職への研修・研究	看護	林 裕栄	教授
7	新掲載	身体運動の操作法の分析と改善	理学療法	山崎 弘嗣	教授
8	新掲載	地域資源を生かした保育実践のモデル構築	社会福祉こども	田口 賢太郎	助教
9	新掲載	がん登録からがん対策への期待	健康開発	大木 いずみ	教授
10	新掲載	社会的成果につながる健康づくりへー研究をどのように実社会に還元するかー	健康開発	北畠 義典	教授
11	新掲載	疾病予防に繋がる新たな免疫賦活法の確立	健康開発	白土 佳子	准教授
12	新掲載	健康経営の推進 ～健康課題の見える化と健康文化の醸成～	健康開発	津野 陽子	准教授
13	新掲載	多主体協働による地域課題の解決手法の開発～持続可能な社会システムの構築に向けて～	大学院	川越 雅弘	教授
14	更新	健康づくり(フレイル予防)・地域づくりシステムの開発 ～住民主体の健康づくり活動・地域づくり活動を支援する事業研究～	理学療法	田口 孝行	教授
15	更新	オンラインの修復的対話でソーシャルディスタンスに立ち向う	社会福祉こども	梅崎 薫	教授
16	更新	障害者権利条約に基づく共生社会に関する研究	社会福祉こども	高島 恭子	准教授
17	更新	彩の国"連携力"育成プロジェクト(SAIFE)による連携力育成支援	理学/田口孝行	教授・看護/國澤尚子	教授

養護教諭とスクールソーシャルワーカーの専門職が協働した 保健室経営の実証的研究



氏名 上原 美子 教授

所属 共通教育科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=258ue>

研究分野
・ 学校精神保健
・ 養護教諭育成

キーワード

養護教諭,保健室経営,教員のストレス,ヤングケアラー,専門職連携
スクールソーシャルワーカー

■ 研究シーズの概要

子どもたちの健康課題及び問題行動等の背景には、自身の心身の問題とともに家庭、友人関係、様々な生活環境が複雑に絡み合っていることがうかがえます。また、子どもたちが置かれている状況や捉え方も個々に異なり、本人に対する働きかけだけでは問題解決が難しいことも考えられます。そのため子ども自身の意向を尊重しながら、その家族を含めた支援を進める必要があります。また、こうした周囲への働きかけや問題の解決には、学校組織の力だけでなく、外部の人材資源の活用や関係諸機関との連携がなにより大切です。

そこで、本研究では子どもたちを取り巻く諸問題に対応するために、社会福祉の専門的知識や技術を有し、背景にある生活面の支援にあたるスクールソーシャルワーカーと生涯にわたる健康の保持増進に責任のある養護教諭による事例検討会を開催し、それらを踏まえた保健室経営案の作成を目指しています。

■ 共同研究のご提案

養護教諭とスクールソーシャルワーカーが協働した事例検討会及び保健室経営案の作成

■ 特定講座のご提案

(1) 社会福祉の視点を取り入れた養護教諭
スクールソーシャルワーカーの協働を可視化
した事例検討会の企画・開催

- ① 家庭環境・貧困問題
- ② ヤングケアラー
- ③ 児童虐待
- ④ 不登校 など

養護教諭とスクールソーシャルワーカーとの
定期的な連絡・打合せの有無



引用:(公財)日本学校保健会 保健室利用状況に関する調査報告書
平成28年度調査結果

■ アピールポイント

今まで、養護教諭のストレス対処、働き方の研究を重ねてまいりました。今後はさらに養護教諭が行う「保健室経営」に専門職との連携を取り入れた研究を進めてまいります。

環境試料中の化学物質の分析法開発

氏名 四ノ宮 美保 准教授

所属 共通教育科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=259shino>

研究分野 ・ 環境化学物質
 ・ 分析法開発
 ・ 環境モニタリング

キーワード 環境汚染物質, 分析法開発, 環境モニタリング

■ 研究シーズの概要

化学物質の環境リスクの大きさは、「有害性の強さ」と「暴露量」で決まります。化学物質の暴露量を評価するためには、環境試料中の濃度を知ることが有効です。しかし、常時、環境中の濃度がモニタリングされている化学物質の種類は非常に少なく、ヒトや生態系への悪影響が疑われている化学物質の中には、分析方法が確立されていないものもあります。我々はこのような環境化学物質の分析法開発に係る研究を進めています。

分析手順



水質試料



土壌試料



前処理

抽出、精製、濃縮

- ・ 装置に注入できる溶剤への溶解
- ・ 測定妨害物質の除去
- ・ 装置の要求感度に対応した濃縮



分析装置

<分析法への要求>

1. 迅速で多数の物質が同時に分析できる
2. 高感度で分析できる
3. 技を必要とせず、個人差が出ない
4. 有害な物質を使用しない
5. ランニングコストが妥当である

<これまでの分析法開発例>

- ・ 河川水中のゴルフ場で使用される農薬の一斉分析法
- ・ 河川水中の親水性農薬の分析法

■ 共同研究のご提案

- ・ 水質、土壌等の環境試料中の有機化学物質の分析法の開発
- ・ 分析用前処理工具等の開発に関する研究

■ 特定講座のご提案

- ・ 水質、土壌及び環境大気における有機汚染物質の分析法の基礎及び分析上の留意点に関する講演・研修会等
- ・ 環境基準項目等に関する講演・研修会等
- ・ 環境試料における有機化合物の分析法開発の検討手順に関する講演・研修会等
- ・ 環境測定分析の精度管理に関する講演・研修会等

対人（援助）職が困難を乗り越えるための支援



氏名 秋山 美紀 教授
 所属 看護学科
 U R L <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=308aki>
 研究分野 ・精神看護学
 ・ポジティブ心理学

キーワード レジリエンス,共感疲労,セルフ・コンパッション,希望,感謝,マインドフルネス

■ 研究シーズの概要

人と関わりを持って仕事をしていく上で、他人の苦痛に対してあたかも自分の苦しみであるかのように感じることで、共感疲労を起こすリスクがあります。共感疲労は、生産性の低下や離職率の増加によって職場環境にも影響を及ぼすと言われています。

共感疲労を起こさないためには、セルフ・コンパッション（自己への思いやり）を培うことが有効です。セルフ・コンパッションは、レジリエンス（困難を乗り越える力）に関連があり、幸せやモチベーションの向上にも関連があることが明らかになっています。

人と関わりを持って働くすべての人が、セルフ・コンパッションを培うことで、困難を乗り越えて幸せでいられることを目指したプログラムを開発・改善しています。

■ プログラムについて

主にポジティブ心理学の技法を用いて、看護職が心のセルフケアをしていく構成のプログラムです。自分の思い込みに気づき、ありのままの自分を受け止め(マインドフルネス)、自分に思いやりをもつ(セルフ・コンパッション)ための技法を紹介しています。8つのレッスンとワークを通して自分が楽しいことや自分の良いところを探し、すべてのことに感謝できる自分を発見していきます。

■ 共同研究・受託研究のご提案

本プログラムは、看護職を対象としたものですが、看護職だけではなく医療職全般、さらにはすべての対人職（店頭販売員、客室乗務員、窓口業務、営業職、コールセンター業務、教員など）に応用できる可能性があります。

■ 特定講座のご提案

関東・関西4県での看護協会での研修、都内大学病院、関東甲信越地区での2大学と2大学病院との合同研修、自治体の公開講座、保健所研修等に用いられています。

■ アピールポイント

レジリエンスは、筋肉と同じく、鍛えられることが出来ると言われています。こころの筋トレのつもりで鍛えておくと、有事に対応できると思います。



ポジティブ感情の身体的精神的健康への効果



氏名 秋山 美紀 教授

所属 看護学科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=308aki>

研究分野 ・ 精神看護学
・ ポジティブ心理学

キーワード ポジティブ感情, ウェルビーイング, レジリエンス, 感謝, セルフ・コンパッション

■ 研究シーズの概要

個人や組織や地域を、もっと豊かにするにはどうしたらよいかということをも科学として探求するのがポジティブ心理学です。健康寿命の延伸を目指すわが国においては、高齢者がいきいきとごきげんに生活できることは非常に重要です。ポジティブ心理学にはそのヒントとなることがたくさん含まれています。

ポジティブ感情が思考や行動のレパートリーを拡張し資源を形成するという、フレデリクソンのポジティブ感情の拡張形成理論をベースに、高齢者が車いすにおいても楽しめるフラダンス（健康フラ介護フラ）の開発を、一般社団法人健康フラ介護フラ協会理事長栗原志功氏、慶應義塾大学前野隆司教授、北海道大学病院横田正司医師と共同で行っています。

■ プログラムについて

健康フラ介護フラは、伝統的なハワイのフラダンスの振付に込められた意味付けを大切にしながらも、日本の高齢者が親しみをもち楽しむように、日本の歌謡曲に合わせて創作したフラダンスです。

主な動作は①腕を高く上にあげる動作、②手を横や前に動かす動作で、基本的に肩のインナーマッスルを含めた頸椎周辺から肩まわり・上腕・前腕の筋力の維持、動作の習得、肩・肩甲骨のストレッチ効果が得られます。

■ 共同研究・受託研究のご提案

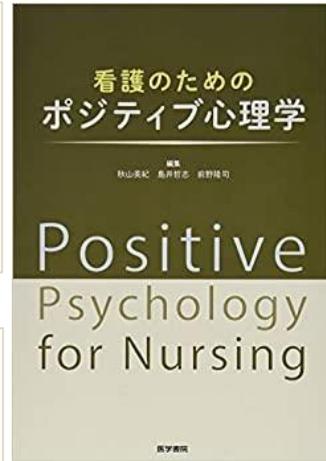
高齢者のポジティブ感情だけではなく、生きがい、生活の質に関するフラダンスの効果の研究、身体的健康への影響、または、高齢者だけではなく、子どもから大人まで幅広い世代を対象として効果を検証したいと思っています。共同研究ではなく、イベントの実施のみのご依頼でも可能です。

※現在（2021年）はオンラインで行っています。



■ アピールポイント

本プログラムは、2018年度グッドデザイン賞を受賞しました（代表 栗原志功）埼玉県・群馬県、東京都の介護施設、北海道の病院、オーストラリアの幼稚園で行われました。



多くの研究者の力を借りて「看護のためのポジティブ心理学」を出版いたしました。

ケアラー支援の研修と看護・介護職への研修・研究



氏名 林 裕栄 教授

所属 看護学科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=121haya>

研究分野
 ・在宅ケア学
 ・家族看護学
 ・老年看護学

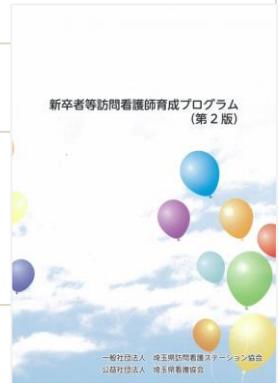
キーワード 訪問看護,在宅ケア,介護者,家族

■ 研究シーズの概要

訪問看護や在宅ケアに関する専門職側や介護を行っているケアラー側、双方からの視点で研究をしてきました。現在は、地域包括ケアの中核を担う訪問看護師へのキャリア支援に向けたプログラム開発を現場の方々と共に進めています。加えて精神障害者の地域生活支援に向けての事例検討会や、ケアラーの概念を広く地域社会に普及するための支援を行います。

■ 共同研究のご提案

訪問看護師のキャリア支援プログラムの開発
 精神科アウトリーチに関する研究



■ 特定講座のご提案

ケアラーの概念、ケアラー支援に関する講義
 家族看護についての講義
 看護職・介護職のキャリア支援研修



■ アピールポイント

近年では、専門職だけでなく非専門職との連携や当事者の力が注目されています。高齢者や障がいを持つ人の支援や、ケアラーの支援をとおして、住み慣れた地域でどんな人でも、その人なりの暮らしを送ることができるような地域づくりを目指して研究活動を行っています。

身体運動の操作法の分析と改善



氏名 山崎 弘嗣 教授

所属 理学療法学科

URL <https://researchmap.jp/hym6541/>

研究分野 ・ からだを動かす原理の探究
・ 応用運動学

キーワード 身体操作,運動協調性,最適性,運動動作分析,効果検証

■ 研究シーズの概要

からだにとって“良き”に動かすとは？単純なようで深遠な問いです。

例えば、セラピストによる治療的な身体操作技法は、対象者の身体部位を、どのような場合に、どのように動かし、どんな効果を生じているか。この研究は、運動協調性と最適性の観点からアプローチし、その効果を左右する要因を理解し、技法改善へつなげていきます。

身体操作の協調性効果を見える化

運動動作分析（モーションキャプチャ、EMG、GRF等）
身体の協調運動の程度を計測。
よりよい計測手法を検討。

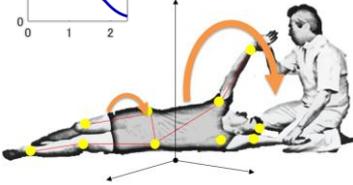
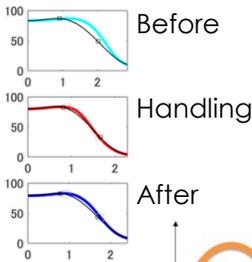
上手なからだの動かし方の特徴を学術的に整理

キネマティクスやダイナミクスの発達原理・最適化原理。
良きに動かすとは、どのように動かすこと？
うまく動く時の身体とはどんな状態？

計測手法や介入・効果指標の改善

状況に応じて実現可能な手法の開発および改善法の提案。
もっとこうすればいいのでは？

角度協調性と理論予測



■ 共同研究・受託研究のご提案

- リアルタイム運動分析
- 身体の調子を知るための生体情報モニタリング
- 運動行動の脆弱化を予知・予防するための研究
- 身体運動を通して働きかけることに関心のあるセラピストやトレーナーとの基礎研究および臨床研究

地域資源を生かした保育実践のモデル構築



氏名	田口 賢太郎 助教	
所属	社会福祉子ども学科 福祉子ども学専攻	
URL	https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=304tagu	
研究分野	・保育学 ・保育の評価	・地域に根差した保育実践 ・保育のベストプラクティス
キーワード	保育,地域連携,コミュニティ,保育者養成	

研究シーズの概要

近年、乳幼児期の保育・教育への公的資金の投入が社会政策的にも効果的であるとの研究の裏付けを得て、保育への関心が社会的にも高まっています。しかし、一方でその関心の集め方には、保育の意義を数値的な「成果」や個々の子どもの能力の伸長のみに還元してしまいかねないという危うさもあります。

子どもの「生活」の場である保育の現場で生起する「出来事」を、地域社会に位置づけ、その保育実践や子どもの具体的なな育ちを「園」内や幼児期だけの意義として完結させず、「地域」や「社会」における意義として捉えなおします。

特色ある「保育」実践が個々の子どもに対してどのような意味をもたらすのかということだけでなく、地域や社会にとってどのような意義があるのか、追究します。

共同研究のご提案

共同研究を通じて

- ・保育の「地域連携」の具体的な在り方を検討し、ベストプラクティスを追究します。
- ・地域の「資源」を生かす保育の取り組みの評価枠組みを確立します。

また、〈保育者養成校〉も「地域」における保育のアクター

の一つです。共同研究を通じては、これまでの

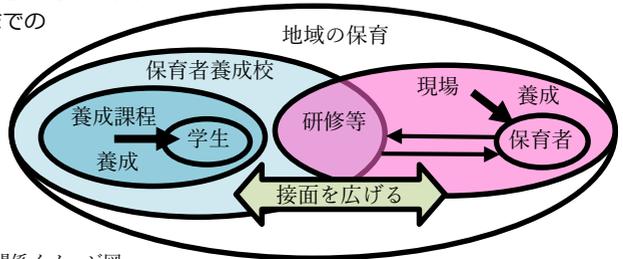
研修（知見の提供）や資格付与としての

保育者養成だけではなく、

地域において「協働する保育」

を駆動する保育者養成校のモデル構築を

あわせて探究してまいります。



▶現状の養成校と現場の関係イメージ図

特定講座のご提案

これまで自治体・保育所等からの依頼を受け、以下のような講演・研修を開催しています。

- 男性の子育て・育児参加
- 記録をもとにした保育の振り返り
- 保育実践の評価

アピールポイント

教育の哲学・思想史研究をバックグラウンドに、保育の具体的な実践や保育者養成のあり方を探究してまいりました。具体的な実践を「方法」としてだけでなく、同時にしっかり「考える」ことを大切にします。

がん登録からがん対策への期待



氏名 大木 いずみ 教授

所属 健康開発学科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=315oki>

研究分野 ・ 公衆衛生学・疫学
・ 疾病登録
・ がん対策

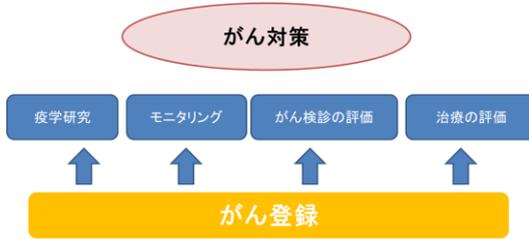
キーワード がん登録,がん検診,がん対策,地域保健

■ 研究シーズの概要

全国がん登録のデータから、都道府県ごとのがん罹患・死亡状況を観察して、その地域に重要ながん対策へつなげる研究をしてきました。

市町村のがん検診事業においても、感度・特異度、陽性反応的中度を求めたり、プロセスを含めて評価検討し、より効果的な検診事業改善への提言をしてきました。

公衆衛生対策を実施する際に必要な、エビデンスとしてのデータ収集について、様々な角度から関与しています。



■ 共同研究の受託ご提案

1. がん登録から地域のがんの状況把握、がん対策への応用など（長期的な検討）
2. がん検診の精度管理の評価
3. 院内がん登録の評価方法
4. 院内がん登録を用いたがん診療の実態把握・感染症や災害ががん診療に与える影響を把握する
5. がん登録の精度評価・向上対策

■ 特定講座のご提案

「がん」に関する健康講座（一般向け）：総論的な内容と予防

「がん」に関する授業（小学生～中学生向け）

「がん登録」精度向上について

■ アピールポイント

栃木県では、保健医療福祉関係の方の調査研究サポート事業に参加実施してきました。

社会的成果につながる健康づくりへ - 研究をどのように実社会に還元するか -



氏名 北畠 義典 (きたばたけよし のり) 教授
 所属 健康開発学科 健康行動科学専攻
 U R L <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=218kita>
 研究分野 ・ 運動疫学
 ・ 公衆衛生学
 ・ 健康教育学
 キーワード 地域自立高齢者, 集団戦略型の健康づくり, 身体活動, 不眠改善

■ 研究シーズの概要

我々は 睡眠に不満を持っている女性自立高齢者31名を4週間、毎日就寝前にヨガストレッチ (5~10分) + 日中に散歩 (20分) を実施する群 (介入群: 15名) と4週間これまで通りの生活を過ごす群 (対照群: 16名) とに無作為に分けて、ストレッチ運動が不眠に及ぼす影響を検討した。その結果、運動を実施した群で中途覚醒時間の短縮 (一晩に途中で目が覚めずに眠り続けられるようになる: 図1)、及び主観的な睡眠感の得点が減少 (得点の減少は良好であることを示す: 図2) が示されました。このことから、実施した運動によって軽度な疲労が生じ、その疲労を回復するために眠り続けられるようになり、そのことで睡眠への満足度が高まったことが分かりました。

これまで、高齢者の健康づくりは機能回復に主眼が置かれる傾向にありました。これからは高齢者が地域の中で生きがいや役割をもって、いきいきと生活できる環境を整える中で健康づくりを目指すことも必要です。また上記のような研究結果を用いて、より多くの人を対象とした際の集団戦略型の介入研究の蓄積が必要になります。

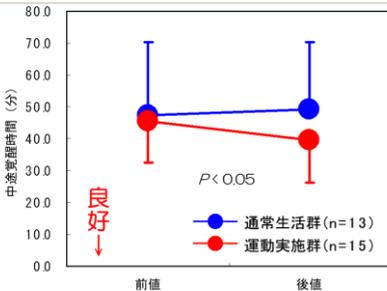


図1 中途覚醒時間の変化
 <眠り続けられるようになった>

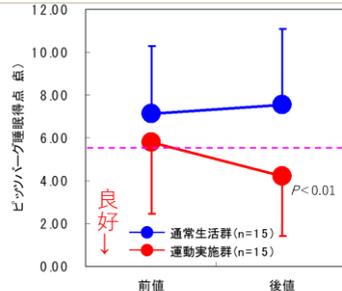


図2 睡眠総合得点の変化
 <睡眠に対する満足度が高まった>

■ 共同研究・受託研究のご提案

- ・ 身体活動 (運動) が地域高齢者の睡眠に及ぼす影響に関する研究
- ・ 地域高齢者の集団的健康づくりのプログラム開発とその評価についての研究

■ 特定講座のご提案

- ・ 地域高齢者の睡眠について
- ・ 身体活動の推進 (座位行動の減少) について
- ・ 地域高齢者の集団的健康づくりの開発とその評価について

■ アピールポイント

これまでいくつかの自治体と共同研究を進めてきています。現在、我々は山梨県都留市の全自立高齢者の健康実態調査を用いて、厚労省が進めている「通いの場」の効果検証を進めています。住民主体の健康なまちづくりを住民・行政・研究者の協働ですすめてみませんか。

疾病予防に繋がる新たな免疫賦活法の確立



氏名 白土 佳子 准教授

所属 健康開発学科 検査技術科学専攻

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=19>

研究分野 免疫学、生体防御学

- ・生体防御機構における免疫システムに関する研究
- ・自然免疫システムの活性制御に関する研究

キーワード 自然免疫, NK細胞, NKT細胞, ノック式胸腺刺激法, 疾病予防

■ 研究シーズの概要

超高齢社会を迎えたわが国では、平均寿命延伸するなかで“健康寿命延伸”に向けた取り組みが重要視されている。健康寿命延伸のためには、加齢に伴う免疫状態の低下を免れ、日常生活の中で免疫状態向上を自ら主体的に取り組むことが非常に重要であると考えます。私たちは、免疫機能の増進を図る目的で考案された「ノック式胸腺刺激法」が免疫機能の活性化をもたらす方法として、「多くの人が簡便で利用しやすい健康維持・増進 並びに 疾病予防」となる効果的な方法として確立を目指すために、胸腺刺激の効果について末梢血免疫細胞動態を調べ、科学的な検証を行なっています。

末梢血中の免疫担当細胞の活性化動態を幅広く解析することで、高齢者における免疫機能の維持・増進に繋がる新たな免疫賦活法として提案することにより、予防医学に貢献したいと考えています。

「ノック式胸腺刺激法」

- ① 両腕を胸の高さにあげ、両肩をそらして3回広げる。
- ② 胸骨部（心臓よりやや上方）を3回叩き、胸腺を刺激する。
- ①, ②を一連の動作として10セットを1日2回（朝、晩）実施する。



この胸腺刺激法の特徴は、特殊な器具を必要とせず、いつでも、どこでも行うことができ、且つ 経済的負担がないことである。

科学的検証では、とくに、病原体などに対する初期の生体防御反応を担う重要な自然免疫系の免疫担当細胞であるナチュラルキラー(NK)細胞やNKT細胞の細胞活性化動態に注目している。中でも、NKT細胞は強力な抗腫瘍効果を示す細胞である。

NK細胞の解析

① CD16-CD56^{bright} NK前駆細胞

CD3 negative

CD36-CD38^{high}

CD36-CD38^{high}

CD36-CD38^{low}

② CD16+CD56^{bright} NK前駆細胞

③ CD16+CD56^{dim} 成熟NK細胞

CD16

CD56

■ 共同研究ご提案

- 胸腺刺激が免疫機能に及ぼす影響に関する研究
- 高齢者の易感染性の評価のためのNK/NKT細胞活性に関する研究
- NK細胞活性化時における免疫反応の制御性応答に関する研究

■ アピールポイント

近年、活性化NK/NKT細胞はがん免疫療法の（NK細胞療法/NKT細胞療法）一つとして非常に注目されている。ノック式胸腺刺激法にて強力な抗腫瘍効果を有するNK/NKT細胞の増加や活性化の亢進が見出されれば、高齢者における疾病予防に大きく貢献する研究となります。

健康経営の推進 ～健康課題の見える化と健康文化の醸成～



氏名 津野 陽子 准教授
 所属 健康開発学科
 URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=299tsuno>
 研究分野 ・健康経営に基づく保健・医療情報を活用した健康課題の可視化
 ・健康と生産性の最適化を目指す働き方モデルの構築
 ・健康・医療情報を活用した「健康経営」の効果測定の分析モデルの開発
 キーワード 健康経営, データヘルス, 労働生産性, 働き方改革, 産業保健

■ 研究シーズの概要

健康経営とは、従業員の医療・健康問題を経営課題と捉え、健康と生産性の両方を同時に行うマネジメント（Health and Productivity Management）の手法です。組織の健康課題を可視化し健康リスクを評価する手法および健康リスクと生産性の関連は国内外において研究が蓄積されてきていますが、健康経営に取り組んだ効果をどのように測定するのか、何をもって効果があると言えるか、学術的にも実践的にも検討課題となっています。組織における健康経営の効果はどのように測定するか、健康経営を促進する健康文化について研究しています。

■ 共同研究のご提案

- 健康経営に基づく健診データ等を活用した健康課題の見える化
- 健康経営推進のための組織（職場）の健康文化の醸成
- 健康課題の見える化と働き方改革の推進

対象組織参加型で組織の課題を検討できるとよいです。

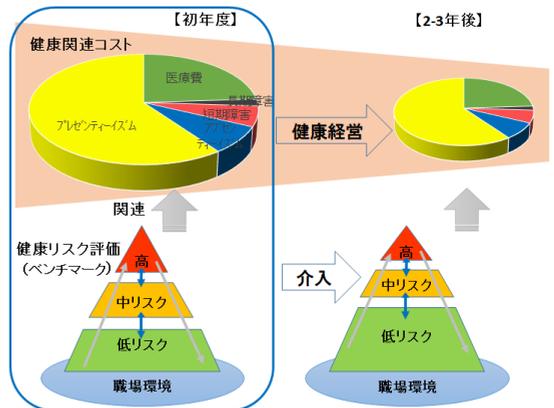


図. 健康経営研究枠組み

■ 特定講座のご提案

- 健康経営と働き方改革
 - 組織と保険者とのコラボヘルス推進
 - PDCAサイクルに基づく保健事業の展開
- などをテーマにした講演、研修会

■ アピールポイント

日本再興戦略に「健康経営」という言葉が出る前から健康経営研究に携わってきました。共同研究等により実践的な健康経営の推進とともに国内外の知見を踏まえた研究的エビデンスの蓄積を進めております。これまで保険者、経営者、保健事業担当者、健康管理担当者などを対象に多数講演・研修会を実施させていただいております。

(参考) 健康経営の枠組みによる健康課題の見える化 <http://square.umin.ac.jp/hpm/>

多主体協働による地域課題の解決手法の開発 ～持続可能な社会システムの構築に向けて～



氏名 川越 雅弘 教授

所属 大学院／研究開発センター

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=262kawa#cont01>

研究分野 ・ 地域マネジメント
・ 地域包括ケアシステム
・ 地域づくり（民間企業・行政・NPO等のネットワーク構築）

キーワード 地域包括ケア,地域共生社会,多主体協働,プラットフォーム

研究シーズの概要

地域課題が多様化するなか、多主体協働による地域課題の解決が現在求められています。これを実現するためには、①ニーズを知る人と解決力を有する人の交流の場の構築、②課題の共有と対策の検討、③プロジェクトの具体的展開が必要となります。

本研究では、地域課題・社会課題の解決に向け、プラットフォームの構築・運営、具体的なプロジェクトの推進（県・市町村レベル）を図っていきます。

共同研究・受託研究のご提案

- 地域・社会課題解決のための**プラットフォームの構築**（NPO・民間・行政等）
- 課題解決に向けた具体的な**プロジェクトの推進**
- プロジェクト推進に向けた各種相談対応 等

【現在行っていること】

- 社会資源を共有するためのセミナーの定期開催（月2回開催）
（<https://www.spu.ac.jp/research/centers/tabid373.html>）
- 多主体を交えた意見交換会の開催（月2回開催）
- 「多主体協働による地域課題解決」を推進するための体制・方法に関する研究

特定講座のご提案

- 地域包括ケア／地域共生社会の実現に向けた制度改正の動向に関する講演
- 地域課題解決手法に関する講演
- 地域マネジメント／事業マネジメントに関する講演・講義 など

アピールポイント

複数の民間企業・日本医師会のシンクタンク・厚生労働省の研究所での勤務経験を有しており、多様な主体の連携・協働を図る上では適任かと思えます。また、すでに、地域課題解決に向けたネットワークも構築しています。埼玉県内で、多様な主体と連携し、地域課題を解決したい人は是非ご相談下さい。

健康づくり（フレイル予防）・地域づくりシステムの開発 ～住民主体の健康づくり活動・地域づくり活動を支援する事業研究～



氏名 田口孝行 教授

所属 理学療法学科

URL <https://www.spu.ac.jp/Portals/0/resources/research/sangakushi-zu.pdf>

研究分野

- ・健康づくり（フレイル予防）
- ・バランス機能に関する研究
- ・地域づくり（プログラム開発、事業支援、効果検証等）

キーワード 健康づくり, フレイル予防, ロコモ予防, 家族介護

■ 研究シーズの概要

「地域包括ケアシステム」および「地域共生社会」において、住民主体による地域課題の解決力強化や体制づくりが必要であることが提言されています。

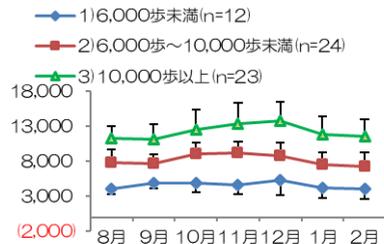
自分個人の健康課題として内向きにとらえるのではなく、地域全体の健康課題として外向きにとらえる志向を持って、**住民が主体となって課題解決（健康づくり）に取り組むことができるシステム（地域づくり）開発**に関する事業研究を行っています。

■ 共同研究・受託研究のご提案

- **運動と食事（栄養）および口腔ケアをコラボさせたフレイル予防プログラムの開発**
- **社会参加を促進させるための地域づくり**
- **現状フレイル調査** 等

● これまで実施した受託研究

- 1) **一日一万歩運動の効果**：歩数、体力、血液検査、医療費等から事業の効果検証。
- 2) **フレイルの現状把握とフレイル予防事業の効果**：フレイル予防サポーター養成テキストの作成と事業の実施、フレイル状態の把握調査等の実施



■ 特定講座のご提案

- **健康づくり, 介護予防, 障害予防（腰痛・膝痛予防, ロコモ予防, フレイル予防等）**について、一般者向けおよび専門職者向けの講座（一般者向けには、楽しく講座を聞きながら、健康意識向上できるよう工夫しております。）
- **健康づくりリーダー育成プログラム（事業）**に関する講座
- **家族介護、介助方法**について実技も合わせた講座

■ アピールポイント

共同研究者・事業担当者と一緒に考える柔軟な研究・事業の実施をモットーとしております。

オンラインの修復的対話でソーシャルディスタンスに立ち向う



氏名 梅崎 薫 教授

所属 社会福祉子ども学科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=194ume>

研究分野 ・修復的対話 ・葛藤変容 ・孤立予防
 ・虐待予防 ・エンパワメント
 ・チーム連携 ・心理的に安全なコミュニティ形成

キーワード 修復的対話,葛藤変容,トーキングサークル,相互理解

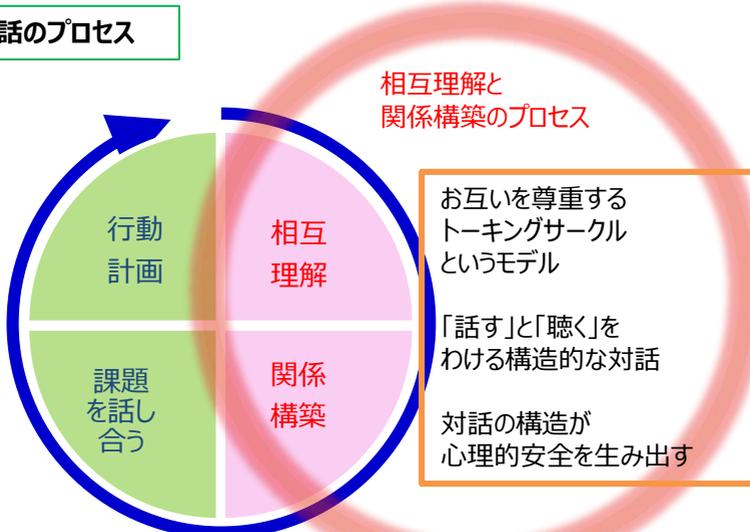
研究シースの概要

- ・新型コロナウイルスにより孤立化が社会問題に、オンラインで安心して対話できるプログラムを開発しました。
- ・修復的対話は、職場や学校など、組織やコミュニティを安心できる場に維持し、葛藤を変容させる対話です。
- ・認知機能が低下しつつある高齢者も対人交流の場において安心して参加できるので、その効用を研究します。

これまでの研究成果から

- ◆レクリエーションのような対話プログラム、たった1回、50分の参加で、学生の不安感が低下しました。
- ◆隔週50分、3回参加することで、学生の対人交流に対する認識が、否定的なものから肯定的に変化しました。
- ◆開発したオンライン・トーキングサークルの効用を実証研究中です。あなたも被験者に！公開講座もあります。

修復的対話のプロセス



葛藤変容のプロセス

修復的対話サークルモデルには、上記4つのプロセスがあり、トーキングサークルは、右側のプロセスだけを繰り返します。構造的な対話なので、安定した心理的安全性を生み出します。

障害者権利条約に基づく共生社会に関する研究



氏名 高島 恭子 准教授

所属 社会福祉子ども学科

URL <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=298taka>

研究分野 ・ 障害者福祉
・ 精神保健福祉

キーワード 障害者権利条約, 地域生活

■ 研究シーズの概要

障害者権利条約の批准により、日本の障害者福祉は既に新たな段階を迎えています。この条約に関連し障害者権利委員会から「一般的意見」が出され、また条約の実施状況を国ごとに評価できる「CRPD指標」も開発されています。これらの資料に照らし、教育や就労、娯楽などさまざまな場面で障害のある人々が取り残されない社会への道筋を皆様と考えたいと思います。

■ 共同研究のご提案

障害者権利委員会の一般的意見によると、自立生活様式において何よりも重要なことは、ただ特定の建物や環境に生活する／しないということではなく、「個人の選択と自律が失われないこと」です。しかし、「本人主体」の理念は理解されても、意思決定プロセスを支援しその決定を尊重し実現するのは、現状では未だ容易なことではありません。支援者のかかわりを支援できる組織やチーム、リーダーシップのあり方の研究をご提案します。

あわせて、一つ一つの取り組みを学びとするエンパワメント評価の進め方を研究したいと考えます。

■ 特定講座のご提案

- ・ 障害者権利条約の目指す「自立生活と地域生活へのインクルージョン」に照らし、日本における地域生活を考えるためのワークショップ
- ・ 人権モデルから「障害」を考えるための講座
- ・ 「障害者権利条約」の諸外国の到達状況を学ぶ講座

■ アピールポイント

特定非営利活動法人日本障害者協議会の「各国の障害者情報」、「障害者権利条約指標（CRPD指標）」のJD仮訳プロジェクトに参加しています。この仮訳から多くのものを皆様と共有したいと考えています。

佐世保市の「心の健康づくりフェスティバル」の実行委員、「障害のある人の権利擁護・意思決定を支えるための推進会議（長崎県手をつなぐ育成会主催）」などに参加してきました。当事者の思いを大切に活動が続けていきたいと思ひます。

彩の国“連携力”育成プロジェクト（SAIPE）による連携力育成支援



氏名	1)田口孝行 教授・2) 國澤尚子 教授
所属	1)理学療法学科・2) 看護学科
URL	https://www.saipe.jp/ https://www.spu.ac.jp/academics/ipe/tabid332.html
研究分野	・多職種連携における連携力育成に関する事業・研究 ・多職種連携教育プログラムによる研修会
キーワード	多職種連携, 連携教育, 連携力, 育成, 教育プログラム

■ 研究シーズの概要

地域住民の“生活の質”, “医療・ケアの質”を高めるための「地域包括ケアシステム」, 「地域共生社会」等で必須とされる多職種連携（IPW）では、各専門職の“連携力”を育成するための教育が必要であることが明確になっております。

- 専門職養成校教育における専門職連携教育（IPE）プログラムの導入
- 各専門職能団体における生涯学習としてのIPE/IPW研修会の積極的開催
- 地域、施設間、施設内におけるケアの質向上のための実践的IPW研修会の開催

■ 共同研究・受託研究のご提案

● 多職種連携実践における連携力育成に関する研究

- 1) 専門職養成校における多職種連携力育成プログラムの発展・効果検証
- 2) 実践者（施設、自治体、地域等）における多職種連携研修プログラムの発展・効果検証
- 3) 連携力育成教育におけるより良いファシリテーション方法の検討 など

※上記に関する共同研究・受託研究を求めています。

■ 特定講座のご提案

本プロジェクトでは、埼玉県立大学以外に埼玉医科大学,城西大学,日本工業大学と連携して、次のような支援,研修会（講習会）開催が可能です。

- 1) 専門職養成校の“連携力”を育成する授業プログラム構築・実施支援
- 2) 専門職能団体の生涯学習としての“連携力”を育成する研修会開催
- 3) 自治体, 地域, 施設, 各種協議会等における“連携力”を育成する研修会（講習会）開催
- 4) 連携力を育成するための専門職養成校間（大学間・専門学校間）の連携支援

■ アピールポイント

彩の国連携力育成プロジェクト（通称 SAIPE:サイピー）は、埼玉県立大学を代表校として、埼玉医科大学,城西大学,日本工業大学および埼玉県が協働して平成24年から5年間の「文科省の大学間連携教育事業助成」を基にして、学部教育における「連携力育成教育プログラム（IPEプログラム）」の開発と実践し、その後も発展を目指して継続しているプロジェクトです。また、学生教育を基にして「実践者向けIPEプログラム」も構築・発展させました。

是非、専門職養成校（大学,専門学校）,各専門の職能団体,自治体,地域,施設,各協議会等において、本プロジェクトを活用していただければと思います。

